

金沢の町を舞台にした空間造形の研究

— 金沢のまちと環境デザイン —

田 中 寛 志
坂 本 英 之
角 谷 修
鏝 隆 弘

1. 研究の目的

環境デザイン専攻では、平成8年の成立から12年にわたり、教員と学生が金沢の街をフィールドとして様々な空間造形に関わる活動を進めてきた。演習、修了制作、卒業制作、街並調査、地域イベントへの参加などを通して、環境デザイン領域の研究と教育の実践の場を築いてきている。平成19年度の学内の特別研究として、これまで専攻の人間関わったデザイン活動を整理、検証する機会が与えられた。

研究は、この街の社会環境、自然環境、生活環境が徐々に変化してゆく中で、今後の環境デザイン領域に求められる活動の方向性と、街への関わり方について専攻の役割を明確にすることを目的としている。

2. 研究の進め方

環境デザイン領域に関わる活動状況として、次の項目について整理を行った。

- ① 環境デザイン専攻の設立と経緯
- ② 金沢の街における教員と学生の活動
- ③ 修了制作および卒業制作の傾向

特に③では、学生が金沢の街に能動的に関わっている活動や制作について、それらの内容の分析を行った。学生の街中における活動と制作は、教育の体制と教員の活動を背景として成立していると考えられる。これら事項を俯瞰的に眺めながら、今後の環境デザイン専攻のあり方について検討を行った。

3. 環境デザイン専攻の設立と経緯

3-1 専攻設立の経緯

開学より間もない昭和28年ごろに学制改革が行われ、その時点から空間デザイン系の専攻設置に関する検討が行われてきた。昭和30年代初めに建築意匠を開設する構想の記述も見られる。(金沢美術工芸大学50年史)平成8年4月、学科再編により産業美術学科がデザイン科と工芸科に分離する折に、科の専門性を充実することを目的に、デザイン科3専攻の一つとして環境デザイン専攻が設けられた。

3-2 専攻の意義とその教育方針

金沢美術工芸大学のデザイン教育が当初より目指しているものは「モノのデザインをおこなう生産デザインと伝達のデザインをおこなう視覚伝達デザインに加え、空間系としての環境デザイン領域が欠かせない」とする理念である。(金沢美術工芸大学50年史)「美術系大学として造形力や色彩、アートに関する感性を高めることを基本とすること」により、領域が比較的類似している他大学工学部建築学科系との差別化を図り、実践してきている。

3-3 特徴的なカリキュラム

環境デザイン専攻の特色あるカリキュラムのために、空間系の演習および建築関連の講義を充実するよう、次のような方針が立てられた。

- ・造形基礎を含む空間的思考を育成する(素材、色彩、描出に関わる演習の充実)
- ・空間デザイン基礎を修得するため構造、意匠、設備、工法を学ぶ
- ・現場体験や実地調査を取り入れる(地域との関わ

りの深化)

- ・ 建築士受験資格を得るための専門科目を開講する

これらの方針に沿った特徴的な演習等は次のようなものである。

- ・ 地図を読む：地図や地形図、現地調査をもとにスケールモデルを制作する。これによりスケール感を理解していく。
- ・ 専攻展示：原寸大の空間の設計と実際に体験することを目的に、美大祭での環境デザイン専攻制作展示において実施している。
- ・ 屋外演習：都市化により市街地に飲み込まれた集落の景観調査を通して、伝統的なものと新しいものが混在する現況を体感し、その場所性を読み取ることと、景観の育成方法を学ぶ。
- ・ 金沢題材演習：住宅、店舗、公共施設等金沢の敷地や環境をテーマに取り組む。これにより現場調査の重要性や金沢の特徴を学ぶ。
- ・ 照明／色彩演習：空間には欠かせない照明計画と色彩を含む素材、材料加工について実地講習とともに実施する。
- ・ 身体空間：一人一人が収まる最小空間を題材に原寸大で企画、制作することにより構造、素材、感覚を体験する。

3-4 教員の構成

大学院を含む専攻の常勤教員の専門領域は次の通りである。

内田祥哉（平成8～12年）

：建築

小松暁一（平成8～10年）

：工芸、インテリアデザイン

黒川威人（平成8～18年）

：工業デザイン、環境デザイン

田中寛志（平成18年～）

：インテリア、ディスプレイデザイン

坂本英之（平成8年～）

：建築、都市デザイン

角谷 修（平成8年～）

：インテリア、ディスプレイデザイン

鏑 隆弘（平成10年～）

：ランドスケープデザイン、庭園デザイン

非常勤講師陣では、平成8年当時は平井聖（建築史）、天野正治（構造）、高島秀雄（設備）、櫛多清（建築史）、林進（景観）、島崎信（屋内計画）、新村利夫（建築法規）、竺覚暁（建築史）、面出薫（照明計画）等による講義および演習が用意された。平成19年までに、実業分野で活躍する下記のディレクター、デザイナー、建築家を招聘するようになっている。

新保智子（株式会社ミキモト）

鈴木恵千代（株式会社乃村工藝社）

平野湊太郎（グラフィック・サインデザイナー）

洪恒夫（株式会社丹青社）

文田昭仁（インテリアデザイナー）

米谷ひろし（インテリアデザイナー）

隈研吾（建築家）

團紀彦（建築家）

妹島和世（建築家）

3-5 現場体験を重視した活動

実寸を想定しながらデザインする能力や、縮尺模型と現物との比較からスケール感覚の育成をすることを目的に、生の現場を体験することを奨励している。そのために専攻設立当初よりイベント現場や博物館、美術館の視察旅行、金沢市内をテーマとした演習に付随する現場調査、空間デザイン領域に関係する企業におけるインターンシップを実施してきている。

4. 金沢の場における学生および教員の活動

大学が立地する金沢のまちは、専攻の人間の日常に深く関わっており、空間や環境を扱う制作過程に大きく影響していると考えられる。金沢のまちを物理的な都市の広がりだけでなく、人々の活動が生み出すある種の雰囲気を持つ「場」として眺めた時に、学生および教員がどのように「場」に関わっている

か、それぞれの活動を通して捉えることとした。

4-1 金沢のまちの魅力と学生

学生が学び住む金沢のまちは、多様な風景を持ち、歴史的にも江戸期から現代までが重層し豊かで奥の深い様相を見せている。

金沢のまちには水が豊かである。まちの中心を流れる犀川と浅野川はそれぞれが個性的な景観を見せ、訪れる人や住む人に歴史的、文学的な記憶を重ねながら、川辺や水の流れの魅力を体感させてくれる。さらに、まちを流れる用水との出会いがある。光のゆらぎや心地よい音を目や耳で触れることができる。水上都市のように用水の上に増築された部屋を発見したり、空中庭園のように用水の上にかかる小さな橋に花々が盛られていたりするのを発見し、夢想することを楽しむことができる。金沢の水の魅力は、憂鬱な気分にもさせる雨の存在が大きい。雨の日は、土塀や樹木、敷石が美しく輝く。学生はこの雨に空間の詩学を見いだす。デザイン演習においては、「雨の美術館」、雨の日にはお店が楽器に変わる「長靴屋」、常に変化する水たまりを取り込んだ「住宅」を提案した。さらに窓のガラス面に流れ落ちるしずくの表情や機能（すりガラスを透明にする）に着目し「ファサード」をデザインした。東京の学生が決して発想しない、金沢に住む学生ならではの視点を持っている。

金沢のまちは坂が多く、路地が迷路のように曲がり豊かな表情を持っている。「路地」の方が「表通り」より文化的香りや音、落ち着きを感じさせるのは何故だろう。それは、車のための道ではなく、歩く人のための道だからかもしれない。歩行の中で、人は記憶や歴史、時間、物語を体感する。小さいかけらのような広場である「広見」を発見することもある。特に坂のある路地は独特の空間である。それは迷宮への入口のように見える。この路地は学生が夢想し、空間のデザインに取り入れる大好きな場のひとつとなっている。

金沢のまちには、時間を含み住人を含め、時代と共に変化する町家が残っている。深い落ち着きの中

に可能性を多く含み、空間デザインにおける再生を学ぶのに最も適した場である。さらに生活の為の基本的な施設である商店街、市場、郵便局、病院が身近にあり、人々の集まる駅や美術館、庭園、種々の学校が立地する。遠くには、卯辰山や内灘砂丘の自然地や湯涌温泉、そして、未開発な駅西側地域や金沢港付近など多様な場が用意されている。

金沢のまちは、京都のように観光スポットは多くない。その分感性を深める夢が多く存在する。それは毎日の日常生活の中で、目に見える豊かさや目に見えない豊かさを、併せて身体的に学ぶことが出来るまちである。

4-2 教室内での教育と金沢のまちでの活動

環境デザイン専攻は、建築とランドスケープを基礎に、インテリアデザインとディスプレイデザインを中心とした空間デザイン領域を教える。制作過程では、学生はまず場所を選び、企画を行い、デザインのためのスケッチを作成、決定されたデザインのパースを描き、図面と模型を制作する。演習で出される制作課題に対する成果の多くは、パースあるいは模型で終了する。そこでは、周囲の香りや音、光や風の揺らぎ、肌触り等を体感すること無くデザインが評価され課題が終了する。しかしながら、教室内でのデザインだけでは内容が限定される。現実社会での空間デザインは、視覚的な色や形だけでなく、空間に包まれた時に、身体として体感して起こるさまざまな感動の存在が、高い評価につながるものになる。環境デザインは、教室内だけでの教育には限界がある。

金沢のまちは、学内の教室に対して、もう一つの大切な教育の場となっている。課題で選んだ場所に立ち、まず身体で空間を感じる事が大切であることを、まちは教えてくれる。また、街の中ではさまざまな「まちづくり」のプロジェクトが進行しており、学生がそれらに積極的に参加し、身体感覚を磨くことは、デザインの実践機会として貴重なものとなっている。

4-3 市立の立場を活かす教育と活動

金沢美術工芸大学は金沢市が設置者であり、学生は金沢アートプロジェクトのほか、金沢市の関わるさまざまな催事に参加できる機会が多い。現場に立つことで、アートマネジメントを学び、原寸大の空間デザインを体感することができる。この経験は、デザイン教育の内容を高めるものとなっている。

4-4 金沢を舞台にした演習内容

環境デザイン専攻の教育が目指す方向は「学生一人一人の潜在能力を引き出し、空間デザイン領域の独創性と基本を教え、将来の社会における活躍の場を引き出す」ことである。また、学生に求める視野と視点は「グローバル視野、金沢の場の強みを活かした一人一人視点」である。金沢のまちは、歴史的記憶とともに生活環境と自然環境が豊かである。学生は学内の教室と金沢のまちという教室の二つを行き来する。日常を舞台にした演習計画をこなすことにより、学生の潜在能力を引き出せると考える。卒業制作では、これまで約半数の学生が金沢市内に敷地を設定している。このことは、金沢の場で認識した視点が、演習により育ってきているものと考えられる。

具体的な演習内容は以下の通りである。

○1年生

- ・「フィールドワークと空間デザイン」
「東山と主計町」を中心に、現場で空間さがしを行い、金沢のまちの魅力を発見する。選んだ場から得られるインスピレーションから、空間デザインを行なう。
- ・「地図を読む」
まちなかの一部の区域の実地調査を通し、地形や眺望や街並などの環境を構成する要素を把握、確認する。庭園、大学、社寺、用水周りなどの敷地と建物を、現地での測量や調査に基づき模型を制作する。これによりスケール感を養い、空間デザインの糸口とする。(平成15年まで)

○2年生

- ・「町家再生」
金沢市「旧観音」や「東山」の歴史的街並に実在する町屋を調査し、新しい使い方を含めた提案に結びつける。併せて町を再生する。
- ・「商業施設」「空間演出」
金沢市内の中心市街地の環境、敷地を題材に店舗等を企画・設計する。
- ・「エコロジー」
郊外開発地区内に残る旧集落において、その自然的、人為的景観の特徴を調査し、その場所における人為および自然形態のあり方についてデザイン提案を行う。

○3年生

- ・公共施設「まちなかのギャラリー」
－ みんなが集まれるかたち －
建築を基本にインテリア、建築、エクステリア、都市オープンスペースまでのひとつながりの空間の造形を獲得する。敷地の特性を形態に反映させ、様々なレベルと次元のつながりをまとめる訓練をする。
- ・「ランドスケープデザイン」
金沢のまちなかにおけるオープンスペースのデザインを通して、地域の魅力をデザイン提案に反映させる手法を獲得する。公園や緑地を眺望や利用者、周辺土地利用、将来変遷を意識した内容として提案を行う。

○4年生

- ・「卒業制作」
4年間の集大成として、毎年約20名のうち約10名が金沢を舞台に空間デザインを提案している。

4-5 金沢の場や特色を活かした作品や活動に対する評価

金沢の場や特色を活かした作品や活動は、各種のコンペティションで評価されている。具体的な評価は以下の通りである。

- ・「AMAMA」(第12回空間デザインコンペティション銀賞2004)
- ・「sarasa」(第1回 ALLES照明デザインコンペティション最優秀賞2005)
- ・「PAPER WALL」(第2回 ALLES照明デザインコンペティション最優秀賞2006)
- ・「雨に浸る家」(第25回日本建築家協会東海支部コンペティション金賞2006)
- ・「金沢アートプロジェクト」(グッドデザイン賞2006)
- ・「金沢冬のオフィスアート」(日本ディスプレイデザイン特別賞2005)
- ・「広坂ひかりプロジェクト」(日本ディスプレイデザイン特別賞2006)
- ・「箔祭り2006」(日本ディスプレイデザイン特別賞2007)
- ・「×沢○計画」(石川県デザイン展 学生部門大賞2006)
- ・武蔵地区地下道「地下づくアート」(石川県デザイン展 学生部門銀賞2007)
- ・「アートプロジェクト2007」(最優秀賞IAD3年生。優秀賞IAD1年生2007)

5. 修了制作および卒業制作の傾向

5-1 修了・卒業制作と金沢のまちとの関わりについて

環境デザイン専攻は平成8年の設立より、平成12年から平成19年までに11名の修士課程修了生と152名の学部卒業生を送り出してきた。修了制作や卒業制作においては、合計163名のうちの6割近い94名が、テーマを金沢市内に設定し制作を行ってきた。

学生は、制作のための場として敷地を設定する。敷地設定はデザインのための単なる空間量の確保ではなく、土地利用、植生、眺望、人々の動きなど、場を構成する様々な環境要素を読み込む重要な過程である。これら場の要素を読み込みながら、制作しようとする空間から排除したり、あるいは活用した

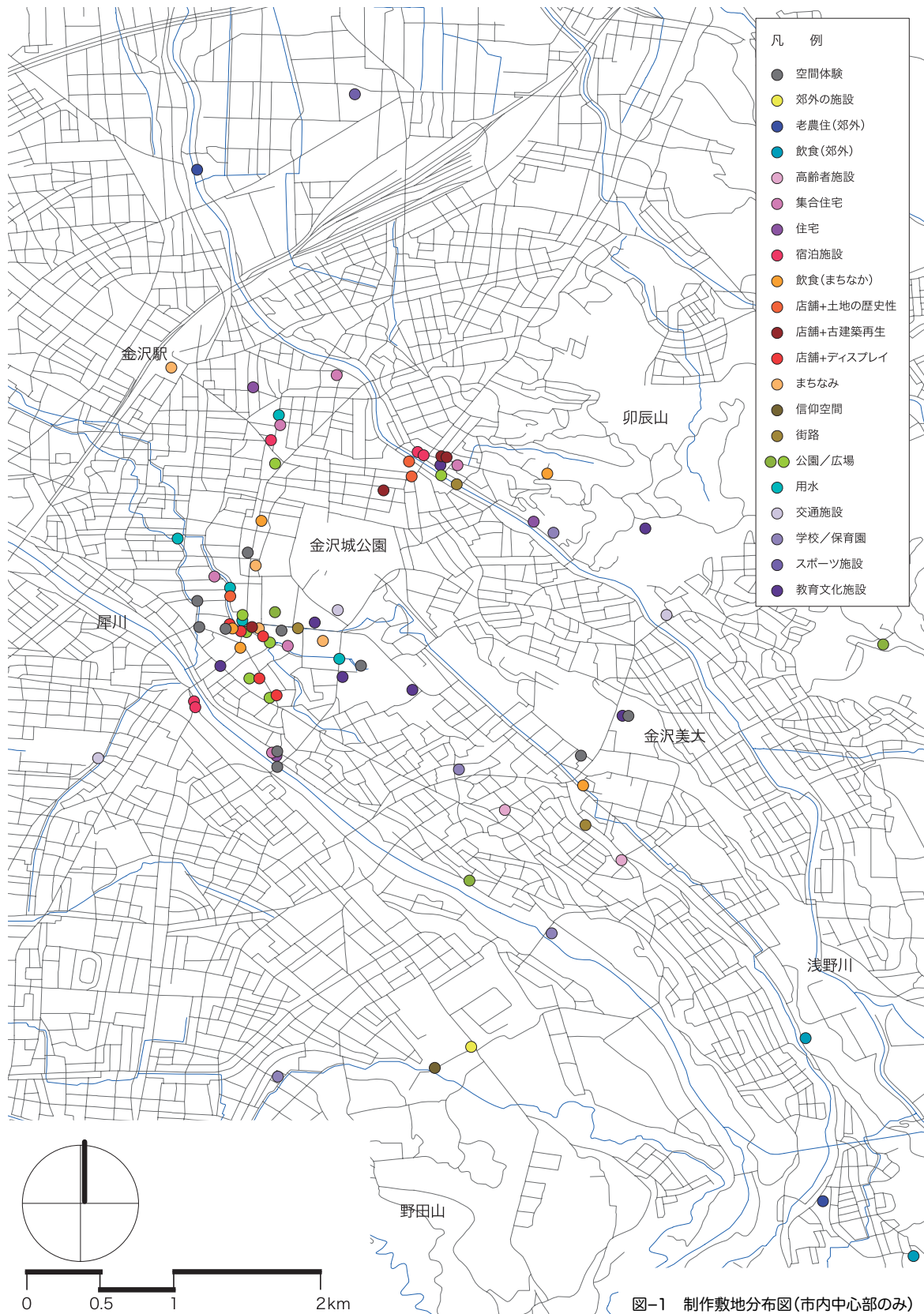
りする過程は、制作においては自身が生み出す形に非常に大きな割合で創造的に関与している。敷地を探す段階、敷地をある場所に設定する段階から、制作は始まっている。

このことから、学生の制作傾向と、それらの市内における分布を見ることで、学生がどのような環境に魅力や問題点を感じているかを知ることができるといえる。制作内容の傾向とそれらの分布は、学生の世代の目に映るまちのホットスポットを指標するものといえる。またこれらの制作の集合が表すものは、金沢の近未来の形の提案であるといえる。

5-2 制作内容の傾向の分析

94点の修了・卒業制作のそれぞれについて、内容を示すキーワードを複数拾いだし、表中においてそれらの出現パターンが似ているものを集めることでグループ化を行った。キーワードは、主テーマは3点、サブテーマは2点、前二つほど重要ではないものを1点として点数を与え、表中でのグループ化の作業を機械的に行うこととした。これにより、タイトルや制作敷地の場所が似ていることで、グループ化の作業において先入観が働くような分類を避け、グループ化後の考察において、制作物を場の条件を含めた内容としてとらえることを機能させるものとした。

また、地図上において制作敷地の位置を落とし込み、キーワードによるグループ化の結果と併せ、グループ毎の制作内容の傾向の考察を行った。グループ化の表(表-1)および制作敷地位置図(図-1)は次に示す通りである。



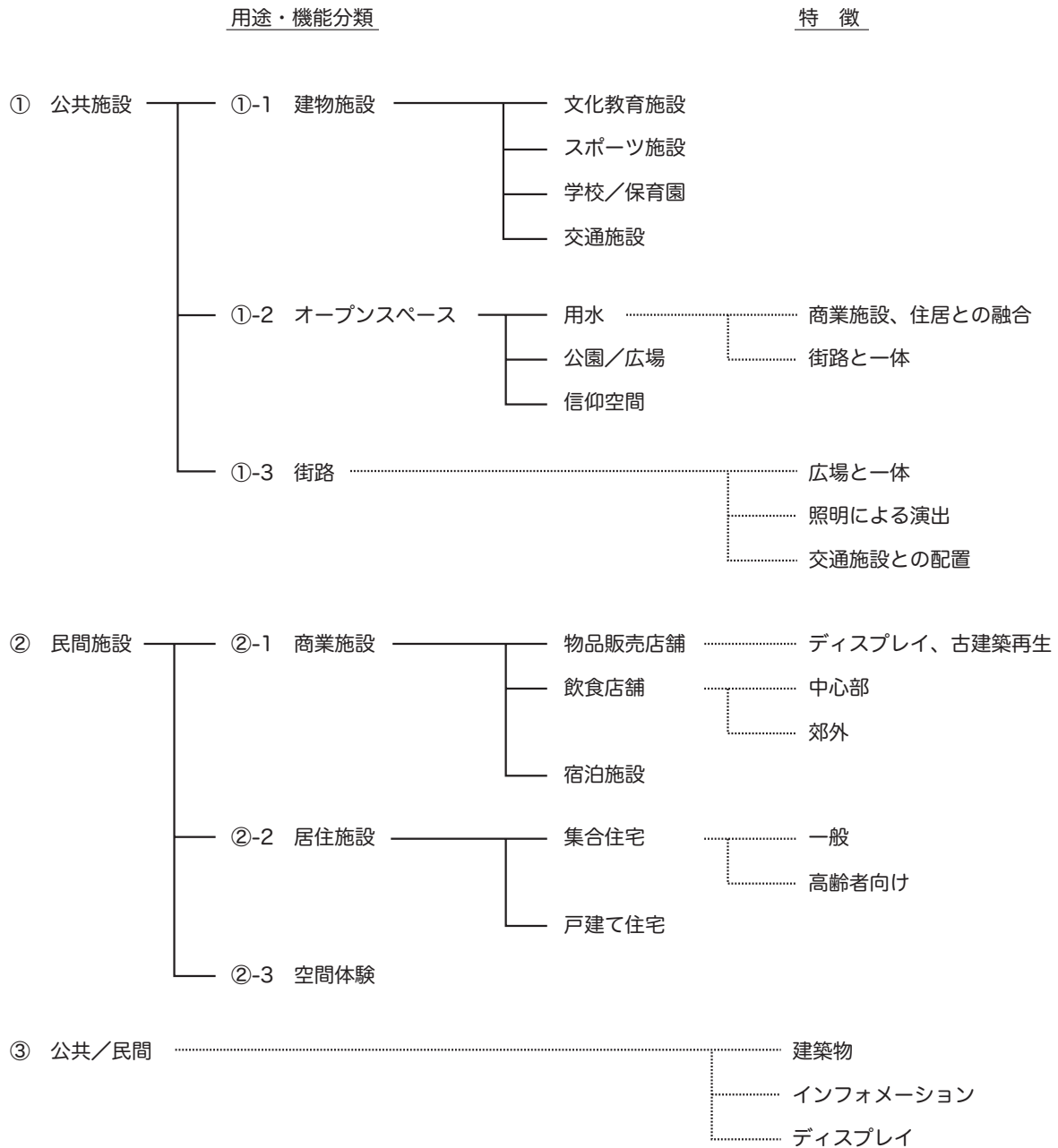


表-2 卒業制作傾向の分類グループ

5-3 制作内容の傾向

制作は表-2に示すように、大きく3つのカテゴリーに分けることができる。公共空間、民間空間、そして公共と民間の両方にまたがるものである。

① 公共施設 (図-2)

公共空間に関わるカテゴリーは、制作点数の約三

分の一を含む。建物施設、オープンスペース、街路空間の3つのグループからなる。郊外よりは、広坂を中心とした小さなエリアに多くが分布している。敷地となった公共空間は、旧来の形態を色濃く残しており、多くの人に関わる場所である。デザインを通してその場所のあり方を、見るものに問いかけている。

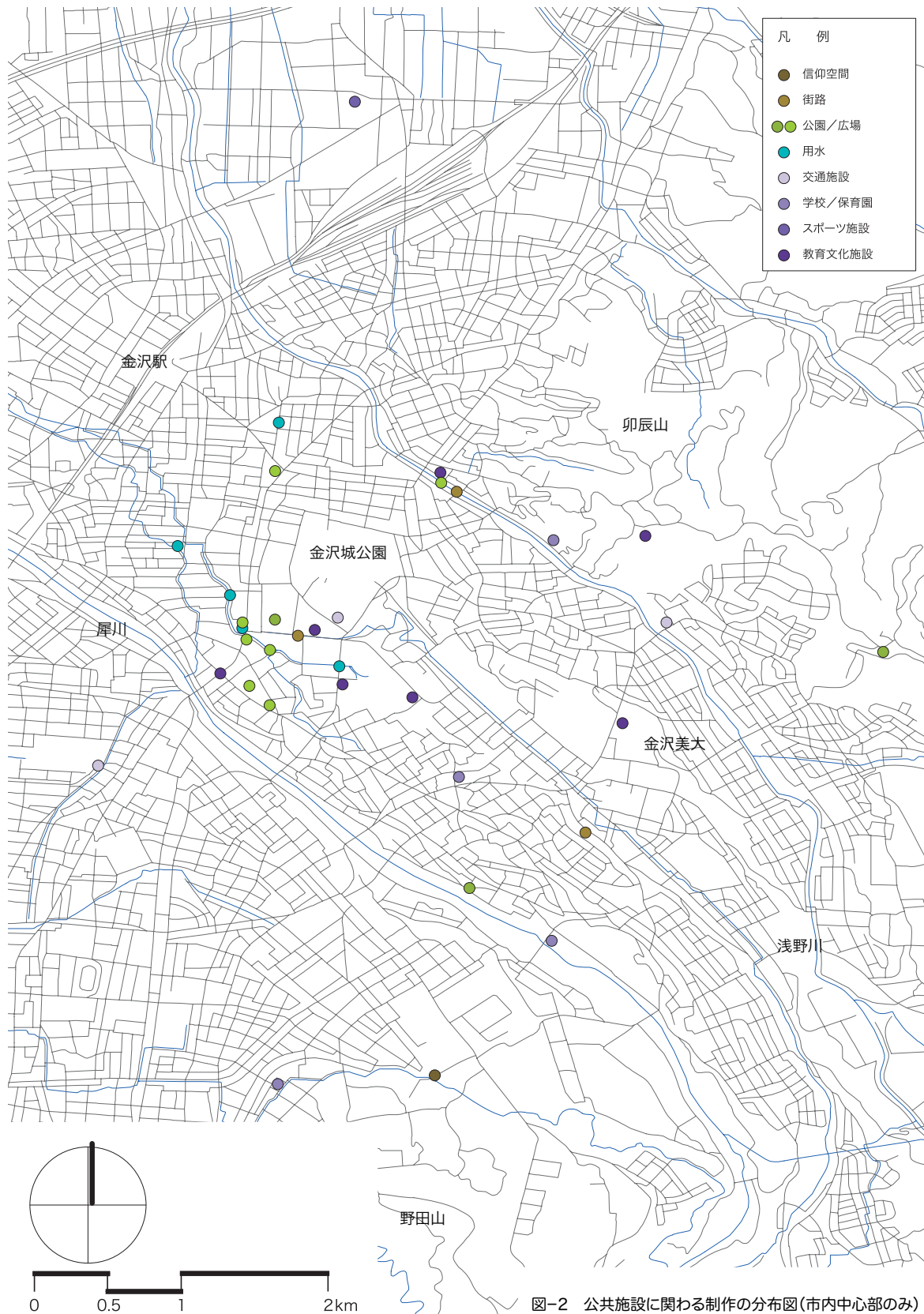


図-2 公共施設に関わる制作の分布図(市内中心部のみ)

①－1 建物施設

9点のうち8点がまちなかの敷地を設定している。用途で最も多いのは、図書館などの教育文化施設である。台地上の眺望に代表される地形の特徴や、歴史的特徴である街の中心部のまとまった広さの敷地を活かしたものが目立つ。加えて、古くからの施設建物や敷地を再生させるテーマ設定が多い。金沢に関わる特徴的なものとしては、演舞場の再生や、まちなかの人通りの多い交差点を含む一画での動物園の提案が挙げられる。

また、金沢の現状課題であるまちなかの公共交通を扱う制作は、乗物自体のデザインから、それが出入りする施設のデザインまで、周辺景観とともに形態が検討されている。

①－2 オープンスペース

金沢の歴史的資産のひとつである用水を扱ったものが多いほか、公園や広場、墓地の敷地を扱ったものが含まれる。

用水は市内での総延長が150km以上におよび、景観を特徴づける大きな要素となっている。制作ではこの点に注目し、用水および隣接する街路、商業施設、居住施設を含めたデザインや、商店街に用水を引き込み商環境の向上を図るデザイン提案がされている。

公園や広場を扱う制作においては、地形の特徴による眺望や、河川の水辺を扱っており、まちなかに入り込んだ自然資源をうまく活用している。

信仰空間では、江戸期からつづく野田山墓地の参道を扱ったもののほか、市内全域の神社を対象としたものがある。旧来の形の現代空間の中でのあり方について言及している。

①－3 街路空間

4点と多くはないが、どれもまちなかの街路空間を扱っており、歴史的な空間をもとに、歩行者の目線でデザインを行っている。シンボリックな大通りを緑地と一体にデザインしたもの、町家が並ぶ旧街道での街路デザインのほか、浅野川沿いの街路の照明

デザインを行ったものがある。

② 民間施設 (図－3)

このカテゴリーには、94点のうち68点の制作が含まれる。制作点数が多いのは、デザインする施設の運用形態と空間形態の自由度が高いことが、学生に好まれたと思われる。商業施設、居住施設のほか、空間体験にテーマを設定したものが含まれる。

②－1 商業施設

このグループには、物品販売店舗、飲食施設、宿泊施設が含まれる。

物品販売と飲食の店舗は、23点と全体の中でも最も多くを占める。物品販売の店舗は、古い建築の再生のものや土地の歴史性の活用のもも含めると香林坊を中心とする比較的狭いエリアと、浅野川大橋周辺に集中している。店舗の外観内装だけにとどまらず、商品陳列、ウィンドウディスプレイまでを、街並との関係の中でデザインを行っている。

飲食店舗は、まちなかのもは基本的に内装の街路からの見え方に配慮している。郊外のもは、地形を取り込んだアプローチや席からの眺望、周辺果樹園との融合を特徴としたレストランなどが提案されている。どれも内装において、外部に広がる金沢の街並や自然の資源をデザインの一部としている点を特徴としている。

宿泊施設は、犀川大橋と浅野川大橋のたもとに2点ずつ、古くからの商店街に1点が提案されている。川沿いのもはどれも川の水面越しに街の中心部を眺めとして取り込むことを特徴として、快適な滞在空間の創出を図っている。

②－2 居住施設

このグループは集合住宅と一戸建て住宅の制作を含む。制作点数は多く、学生の興味の対象を示している。

一般向けの集合住宅は、まちなかにおいて7点の制作がある。分布としては、川や用水に隣接する敷地設定や、旧来の町割りの中での敷地設定が特徴的

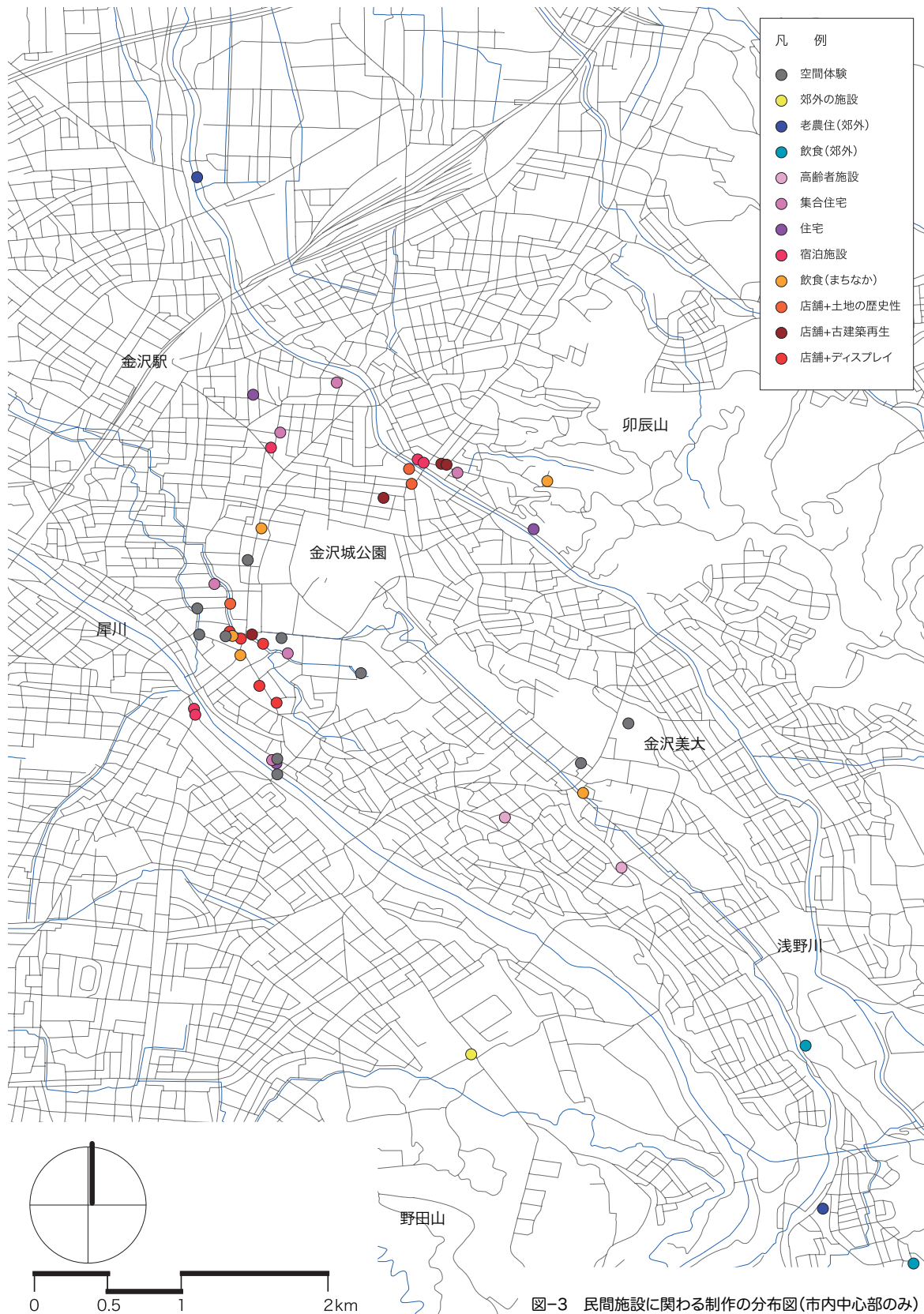


図-3 民間施設に関わる制作の分布図(市内中心部のみ)

である。市の中心部における空洞化に対する策のひとつとして、まちなか居住を促進する形態を提案しているものである。

高齢者向けの集合住宅施設の制作は、どれも比較的に郊外寄りに敷地を設定している。金沢の地形の特徴である台地の斜面に敷地を設定し、それに伴う眺望や屋内への日当りを活かした施設形態を追求している。

一戸建ての住宅は、まちなかでは2点が川沿い、1点が旧来の町割りの中で敷地を設定している。住宅内部の空間構成には旧来の町家に見られる形式を、敷地特性や周辺環境に加えてデザインに取り入れており、場所性を活かした制作となっている。

郊外においては、農のある都市居住をテーマにした一戸建て住宅の制作が2点見られる。現状でアーバンフリンジといえる都市開発と農地の境界部であり、まちなかの空洞化と対になる今様の問題に触れながら、エコロジーの視点を含んだデザイン提案を行っている。

②-3 空間体験

このグループに入る制作の特徴は、敷地の特性を反映した空間デザインではあるが、主題における場所性の関わりはやや低い点にある。空間とそこに入った人が感じるものの関係性にスポットライトを当てたものである。屋外空間でのライトアップ、客席を含む演劇空間のデザイン、シークエンスが主題のギャラリー、場所の特性を楽器に見立てた建築物群、展示会場自体を展示物として扱ったもの、雨の多い気候を利用した庭園の装置などが含まれる。

他のグループの制作に比べ、テーマ設定自体に特徴があるといえる。環境デザインの領域としては、芸術的な色合いの濃いものである。

③ 公共と民間の両方にまたがるもの（図-4）

このカテゴリーには、建築、マップインフォメーションディスプレイが含まれる。用途や運用形態が公共でも民間でもどちらでも可能なものである。

建築の特徴としては、外観と空間構成を重視し、

街並に与える効果をテーマとしている点である。2点の制作は香林坊と尾山神社前の敷地を扱っている。

マップインフォメーションブースディスプレイは、金沢の場所や歴史的な情報を、利用者に知らせる装置のデザインである。2点の制作は、機能と形態にふさわしい設置場所として金沢駅と金沢21世紀美術館に設定している。



6. 金沢のまちと空間デザイン教育

金沢の魅力は、重層する江戸から現代へのつながりに寄るところが多い。人口45万のコンパクトシティの中で、時間軸と風景軸がいい形で繋がっている。

坂と路地に特徴づけられるまちなかは、二つの川と繋がる用水が縦横に流れる。そして、そのまわりを斜面が緑を深くして囲み、都市の風景に陰影を与えている。金沢において、歴史、文化、自然をとりまく伝統環境の保全はよく成されている。伝統芸能、文化を活かしたまちといえる。しかし、現在から未来にかけてのそれはないといえる。近年で言えば、せいぜい金沢21世紀美術館ぐらいであろうか。伝統芸能・文化を活かしていくのはよい。しかし、それと同時に、紅殻格子や50本、総延長150kmを超える用水、借景として町を包む山川をもっと現代施設などに活かしてよいのではないだろうか。

金沢は、その置かれた環境に満足しているように見えるが、京都の町のように観光的なものは意外に少ない。その分、自らが構想しなければいけないだろう。目に見える豊かさをイメージするように、目に見えない部分から形にするために、雨や路地等を使った学生作品がある。町を豊かにしたいという思いが学生には強い。金沢からもっと世界に発信するきっかけになるはずだ。素敵な事例を示して世界に発信する努力があってもいいのではないだろうか。

建築家は、スケッチや図面、模型を多くつくり、構想を形にしてきた。そこには多くの努力がある。金箔や陶磁、あるいは漆、漆喰に至るまでの素材や技法の豊富さ、または、借景のとりかたにしても、堅町の通りの向こうに山があることや、川の活かし方について、アムステルダム運河の活用や、盛岡の北上川の利用が良い例となる。また、路地や坂については、先斗町、神楽坂などの活かし方が優れているといえるだろう。商業空間と生活空間が同居し、本来の空間を活かしている。

多くの来街者による金沢の印象は、過去の遺産の保全はしっかりしているが、それ以外についてはほ

とんど試みていない、というものだろう。それは、言い換えれば、私たちは昭和、平成の伝統をつくっていない、ということになる。パリ、ロンドン等は、過去の遺産を保全しながら、新たなスタンダード(世界標準)をつくっている。それらはいくつもの試みの複合であるが、基本的には町を回遊させて、楽しくしようとしているものであるといえる。

金沢でまちを体験させようという試みを行うとすれば、東山の様な観光地ではなく、学生作品からは、「スクランブル動物園」、「駅インフォメーション」、「郵便カフェ」など、日常の場所において、まちがもっと楽しくなるデザイン提案が見られる。また、「かなざわ港」、「内灘の都市開発」等まちを楽しむために、もっと開発してもよいのではないだろうか。ウォーターフロントの楽しい開発等が金沢のまちの開発の事例のサンプルになれば、世界に発信できるだろう。

学生作品はしかし残念ながら、実現性の高い事例提案には至っていない。今後もっと、金沢市や市民、民間企業と組んで、活かしていくことができれば発展が期待できる。郵政民営化に対する市からの発信は、時代の要請に応えるものとなるだろう。時代に敏感に反応している学生作品は、時代に即応して提案している作品である。例えば、案内カフェは「ネット」、小学校は「いじめ」等である。

今回の研究を振り返ってみると、多くの作品が金沢について提案していた。この傾向はこれからも続くだろう。もう少しまちづくりと関連させて、金沢市の要望を入れて発展させていく必要があるだろう。これからは、市との連携を模索していく必要性を感じる。製品デザイン専攻や視覚デザイン専攻では、企業との連携が時代の潮流である。環境デザイン専攻は、産官学協同の時代において、金沢市との連携を更に強めたい。これまで、ウィンドウディスプレイ、箔祭りなど、イベント的なものが多いが、全国的なコンテストで高く評価される等、空間へ展開する可能性を見せることが出来た。しかし、催事での参加はしているが、空間的な参加は十分にしていないといえる。これらの材料をもって、市との連携

を模索していく時期に差し掛かっているのではないだろうか。

環境デザイン専攻が十年以上の実績をつくり、専攻の方向が見えてきたところで、次のステップへ入る時期に来ているといえるだろう。学生にとっては、現場に歩いていける幸せがあり、実際に日常で生活している場である。これまでも、銀座と資生堂や芸大と上野・御徒町等が行ってきたように、金沢と美大もまちづくりでの強い絆をつくる時代に入った。

金沢美術工芸大学は美術とデザインに関するの教育研究機関である。金沢は文化都市として、現在と未来をもっとつくる使命がある。金沢21世紀美術館で来街者、外国人が増えた効果をパワーアップし、文化と時代感覚をハイブリッド化していくことに力を注ぐ時である。時代感覚は、これからの人たちである学生たちが持っている。例えば、ビジネス空間と文化空間との融合をめざすことが挙げられる。都市のブランディングがまさにこの部分で起きている。過去の伝統的なものはしっかりある（路地、坂、城、用水、河川等）。一個の店（建物）とまちづくりの融合が場の力を引き出す例は枚挙にいとまがない。現在は、個と全体の融合を図り、金沢の独自性を打ち出すチャンスがあふれている、またとない時期である。

（付記 本研究は平成19年度特別研究の成果である。）

（たなか・ひろし 環境デザイン／
ディスプレイデザイン）

（さかもと・ひでゆき 環境デザイン／
建築デザイン）

（かどや・おさむ 環境デザイン／
インテリアデザイン）

（つば・たかひろ 環境デザイン／
ランドスケープデザイン）

（2008年10月31日受理）